

分科会 1

① ICT 活用指導力向上に向けた取組みや観点の特徴～石川県内の教員への調査に基づく一考察～

田向 海裕（金沢大学）

石川県内の小学校教員に、ICT 活用指導力調査と ICT 活用指導力向上に向けた取組みや課題に関するインタビュー調査を行った。ICT 活用経験が浅い若手教員は、機器を「活用すること」に課題を感じ、文献調査や研究会で学び解決しようとしていた。一方、ICT 活用経験が豊富な教員は、「活用すること」は前提で、活用の仕方は効果的かどうかで課題を感じていた。これらの結果から、若手教員が ICT 活用指導力を向上させるための取組みや観点を考察する。

② 中学校理科における生徒の思考力・表現力を育む授業設計～ICT を活用した主体的・対話的で深い学びを目指して～

北濱 康裕（小松市立板津中学校）

生徒の実験結果を既習事項と関連づけて考察し（思考力）、説明する力（表現力）を育むために、ICT を用いて実験結果を記録し、対話を通して考察した上で説明する授業設計を行った。授業実践の結果、既習事項を想起し、実験結果と関連づけながら説明する生徒の姿が見られ、ICT を用いた授業設計の有用性が示された。しかし、記述式の評価テストにおける正答率は64%と高い値ではなく、学習の定着度の面では課題が残った。

③ 国語科スピーチ授業におけるルーブリックを用いた授業—自分に自信のない児童が大きな声で話すために—

北洋輔（白山市立蝶屋小学校）

毎年、どの学級にも、声の小さい児童が一定数存在する。そうした児童に自信を持って話をさせるために、一学期から「話すこと」をメインとした言語活動を多く設定してきた。しかし、そうした児童は、言語活動を何度重ねても成長が見られず、逆に自信を失っていきようにさえ感じた。そこで、このような活動が、成長や自信につながってこなかったのは、パフォーマンスの評価基準があいまいで、児童らが目指すべき姿が不明瞭であったことが理由なのではないかと考えた。本研究では、そうした点を改善するため、パフォーマンス評価を明確にするためのルーブリックを作成し、より妥当な視点から自己評価、相互評価を行うことで、児童が成長し、自信を持って話すことができるための授業づくりの工夫を行う。

④ 自主研究会への参加によって得られる気づきの分析 ～金沢大学授業力向上ゼミを対象として～

福田 晃（金沢大学附属小）

教員の自主研修会である金沢大学授業力向上ゼミにおける参加者の所管を分析した。結果、参加者

は、自身の状況を客観的にとらえ、他人の授業観にふれるなかで、自身の授業観を見直したり、具体的な教授方法の検討を行ったりしていることが明らかになった。さらに、参加することを通し、単に気づきを得られるだけでなく参加者の授業力向上に対する意欲の向上が見られた。

⑤ ネット社会のコミュニケーション力育成を目指す授業の設計・実施・評価ー中学校の全校生徒を対象とした授業の2年生分の実践と評価を中心にー

村井 万寿夫（金沢星稜大学）

中学生を対象にネット社会のコミュニケーションをテーマとした授業を設計、実施した。実施後、コミュニケーション力育成について生徒の考え方を整理・分析するとともに、道徳の内容項目に照らした評価を加えた。その結果、いけないことをしたときは「謝罪」「正直」の対応が多くを占め、人として行う行為として最も大事な行為を示した。道徳の内容項目に照らせば他の人とのかかわりに関する「謙虚」「思いやり」「信頼・友情」、自分自身に関する「強い意志」などが示唆された。

分科会 2

① 情報モラル教育における体験的活動～「SNS Chat! Ver2.0」の実践から～

沼田 萌菜（金沢星稜大学） 清水 和久（金沢星稜大学）

情報化の進展により、児童が自ら判断することができる態度が求められている。体験的活動を取り入れた情報モラル教育は、児童が実感をもって学ぶことができると考え、教育現場で「SNS Chat! Ver2.0」を用いた授業設計・実践を行い、体験的な情報モラル教育についての有効性を検証した。その結果、授業後に行ったアンケートでは、児童の情報モラルに対する意識の変容が顕著に表れ、体験的な情報モラル教育が有効であることがわかった。さらに、①事前準備②iPadでの文字入力技術③体験の工夫④交流の方法の4つの段階的要素が実践時に必要であることが明らかとなった。

② 小学校や国際活動団体における国際理解教育の現状と課題～平和な世界を築くために私たちができること～

宮田 悠佑（金沢星稜大学） 清水 和久（金沢星稜大学）

現代の社会では未だ解決できない国際紛争等の国際問題が絶えず起こっており、南北問題といった先進国と発展途上国との貧富の差が激しくなり、地球規模の問題となり深刻化している中で、国際的な協調が必要になっている。この現状を理解する教育を、国際理解教育教材を使いながら、小学校現場で広く普及している。児童の興味・関心を引き出す教材を教師の工夫された指導によってより効果的に学ぶことができるのである。

③ 算数科におけるプログラミング教育の授業設計

山口 眞希（金沢市立大徳小学校）

新学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善として情報活用能力の育成を掲げ、そのために「児童がプログラミングを体験しながらコンピュータに意図した処理を行わせるための論理的思考力を身につける学習活動を実施すること」が述べられている。そこで本研究では、小学校高学年の算数科において、プログラミング体験を取り入れた授業を設計し実施した。その結果、体験を取り入れることで児童がプログラミングの良さを実感できていたことが分かった。また、プログラミング体験を取り入れた授業設計を行う際の留意点を検討することができた。

④言語発達に遅れのある児童のための感情表現のための語彙の獲得に向けた学習プロセスの工夫

荒木 弥生子（金沢市立中央小学校芳齋分校）

これは、自分の思いを表すことや相手の思いを受けとることが難しい言語発達に遅れのある児童に対して、感情を表現するための語彙の獲得に向けて行った3期にわたる実践である。身につけさせたい言葉の選定とその理解を進めながら、児童の関心を引きつける題材による作品づくりから実際に取り上げた言葉を使った交流につなげる学習プロセスを繰り返すことで語彙の獲得を図った。

⑤新学習指導要領との連携を考えた国際協働学習の在り方～英語活動と国際理解教育の在り方～

角納 裕信（金沢立大野町小学校） 清水 和久（金沢星稜大学）

金沢市は、英語特区となって以来、独自のカリキュラムと副読本を作成して英語活動を行ってきた。文部科学省から、正式に入ってくる外国語に対して、どのように捉えて実践していくと、「学びに向かう力、人間性等」が養われていくのか、について実践例を出しながら考察していく。

また、高学年においては、中学校との接続を意識していかなければならない。どこを押さえつつ、児童に学ばせていかなければならないか、ということについても考察していく。

分科会 3

①跳び箱運動における楽しさの形成—ICT を活用した授業としない授業の比較を通して—

大木 竜馬（金沢星稜大学） 佐藤 幸江（金沢星稜大学）

文部科学省は「スポーツを通じて国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営むことができる社会を実現すること」を求めている。また、体育の授業に肯定的な意識をもつほど、卒業後も自主的に運動やスポーツをしようと思う割合が高いことを公開している。一方、近年、体育科においてもICTの活用の広がりが見られ、これまで自分の技を確認することはできなかったが、ICTを活用することで確認できるようになった。大後戸ら(2015)の体育科におけるICTを活用したグループ練習の実態調査研究では、ICTを活用することによって、どこを練習すればよいかのめあてをもてることにより、こ

れまで以上に「わかること」を内包した「できること」を求めて、楽しんで体育学習に取り組む姿が見られるようになったと報告されている。

そこで本研究では、ICTを活用した体育とICTを活用しない体育の授業の楽しさに違いがあるかどうかに着目し実証研究を行った結果、楽しさの質の違いについては、明確な差は見られなかった。

②自己肯定感を高めるICTを活用した授業づくり—特別支援学級における取組—

佐々木立愛（金沢星稜大学）佐藤 幸江（金沢星稜大学）

特別支援学校学習指導要領解説自立活動編（2009）には、特別支援学級に在籍する児童に見られる傾向として「障害のある自分をひどく他者より劣っていると思うことがあり、自分を肯定的にとらえられないことが少なくはない」とある。また、児童の自己評価が困難な場合が多く、その実態を踏まえた上でICTを活用することにより、児童の主体性を伸ばすなどの発達を促す先行研究が見られる。そこで、児童・生徒の実態をどのように見とり、効果的にICTを活用した授業設計を行うことで、児童にどのような変容が見られるかを明らかにしたいと考えた。その結果、自己評価の難しい児童に対し「東京都版他者評価シート」の評価項目を援用し授業者が児童の課題を把握し、その落ち込みを是正するためにICTを活用することで、変容が見られることが明らかになった。

③生徒の主体的な学びを促すBYODを活用した授業改善とその可能性～内灘高等学校の新たな取り組みを踏まえて～

崎山 寛之（石川県立内灘高等学校）

「分かることの喜び・学ぶことの楽しさ」を感じられる授業を日々目指している。本稿では、生徒がより自主的・主体的に授業中の学習を進めていく支援として、生徒個人が所有するスマートフォン端末、すなわちBYOD（Bring Your Own Device）を活用した授業の実践を取り上げる。ICT環境が整備されるのを待つのではなく、身近にある情報通信技術を効果的に活用し、生徒自身が分かりやすく深まる授業の可能性を考えていく必要がある。本実践は、数学科に留まらず、どの教科でも汎用的に活用できる実践だと期待したい。

④情報との関わり方を考える～日常的な情報受信体験と国語科「想像力のスイッチを入れよう」単元をつなぐ学びを通して～

海道 朋美（金沢市立田上小学校）

本研究の目的は、情報との関わり方を児童自らが考え、情報に対する多角的な見方・考え方を育む指導方略について追究することである。そのために、日常的な情報受信体験と国語科での取り立て学習を実施し、児童の記述等の分析から考察した。その結果、次のことにおいて有用性が示された。1）教材文での習得内容を日常的事例で活用する場の設定 2）自他の見方・考え方の違いに出会う日常的な機会